

東洋学研究情報センター共同研究課題研究成果最終報告書

※この報告書はHPなどで公表されます。

1. 研究課題名

日本漢籍集散の文化史的研究―「図書寮文庫」を対象とする通時的蔵書研究の試み―

2. 申請研究者

(氏名) (所属・職名)
住吉朋彦 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 教授

3. 申請者以外の共同研究者

(氏名) (所属・職名)
大木康 東京大学東洋文化研究所 教授
小倉慈司 国立歴史民俗博物館 准教授
金文京 京都大学人文科学研究所 教授
佐藤道生 慶應義塾大学文学部 教授
高橋智 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 教授
陳捷 国文学研究資料館 教授
堀川貴司 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 教授

3. 研究期間 平成24年4月1日～平成26年3月31日

4. 課題の概要

本研究は、日本に伝来する漢籍が、日本文化の形成にどのように寄与したかを明らかにするために構想された。また目標達成のため、日本漢籍を、伝来を同じくする群、即ち蔵書として捉え、個別の伝本を蔵書の中に位置付け、蔵書ごとに日本文化との関わりを観察する方法を用いた。蔵書は静止せず、集散する性質をもつから、伝本の調査を重ね、その集散を捉えることが、研究の基礎として要請された。また研究の対象として、宮内庁書陵部図書寮文庫収蔵の漢籍を選んだ。これは図書寮文庫が、江戸幕府紅葉山文庫の善本を引き継いでおり、さらに紅葉山文庫を通じ、中世以前の金沢文庫本等の一部を保存し、日本漢籍史上最重要な蔵書と認められるからである。また図書寮文庫には、江戸幕府昌平坂学問所収蔵の善本や、同教官古賀家の蔵本他、近代以降、皇室に献上された諸家の図書を収蔵し、それぞれ日本漢籍を含むことから、同様に調査の対象とした。但し対象とする図書は膨大であるため、日本文化史の古層に関係する、中世以前伝来の漢籍を当面の対象とした。この研究を成し遂げるため、文献学を専門とする研究者を集めたが、さらに大学院生を含む若手研究者に原本調査方法の研修を実施して参加を促し、態勢の拡大に努めた。また調査結果を個別にも公開するため、伝本の書誌と全文の映像を提供するデータベースの作成を実行した。こうした実態により、本研究では、図書寮文庫収蔵漢籍の伝本に書誌調査を加え、伝来の経緯と伝来中の漢籍習学の痕跡を記録、集積し、蔵書の転変を明らかにした。

5. 研究成果の概要

本研究の成果は、デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」に集約した。このアーカイブは、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵の漢籍に関する、書誌書影データベースと全文映像データベースの、2つのデータベースを有し、書誌調査から抽出した分類目録を、共通のメタデータとして両者を統合する構成であり、伝統的な漢籍分類目録、または特定の条件でそこから検索、抽出された書目を入力として、原本の書誌と映像を、相互に参照できる学術的コンテンツとした。その画像が殆ど、新規のカラーデジタル撮影に拠ることと、書誌データも本研究で新たに検討著録した成果であることを特色とする。平成25年度末の時点で、旧鈔本または宋刊本33種281点を収録し、経部18種146点を完全に収める段階に達したことから、平成25年12月7日に、東京大学東洋文化研究所大会議室に於いて公開の成果報告会を行い、個別の調査研究成果とともに、デジタルアーカイブ製作の報告を実施した。これに並行して、原本所蔵者である宮内庁書陵部と覚書を交わし、平成26年度からの、当所東洋学研究情報センター及び慶應義塾大学附属研究所斯道文庫内に於ける、試験公開の準備を整えた。また書誌調査と研究検討の成果は、2年間の研究を通じて51種654点に及んでおり、デジタル画像の取得も58種7726点206,910カットに達していることから、後続の研究計画により、順次データベースに実装、公開していく態勢を築くことができた。

6. 公開済み(または予定の)具体的な成果物(データベース、論文、著作本、出版物等) デジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」経部(公開予定)